

仙洞御所由来 麒麟住吉図末廣



麒麟図



(修復前)



住吉図



(修復前)

京都の山科にある門跡寺院勸修寺が永く寺宝として保管していた「仙洞御所由来 麒麟住吉図末廣」は、平成28年(2016)に、勸修寺より当館へ寄託されたものである。当館では、平成17年度より数度にわたって、勸修寺から山階宮家関係史料の寄託を受け、調査研究を継続している。

勸修寺は、昌泰3年(900)に醍醐天皇が生母藤原胤子の追善のために造立。胤子の父・藤原高藤の諡号より勸修寺と号した。文明2年(1470)に焼失したが、天和2年(1682)に至り霊元天皇皇子・済深法親王が入寺したことにより再興された。霊元天皇は江戸初期の朝廷文化興隆に大いに功績があったことで知られる。同作品は、霊元天皇より同寺中興の祖である済深法親王に下賜されたとの由来から、以来同寺寺宝とされ、大切に保管されてきた。

しかし、経年による劣化が進み、破損・剥落が顕著となっていた。そのため修復をし、長く安定的に保存することが喫緊の課題であった。幸いにも令和元年(2019)度より公益財団法人三菱財団が文化財修復助成事業を開始し、申請・採択となり、この度修復が完了したことから、本展覧会において、広く公開する運びとなった。

(学芸員 長佐古美奈子)

本作品は、表面は霊獣の麒麟、裏面には摂津国の住吉大社が描かれる。両面とも緻密な描写と鮮やかな色彩が目を引き。麒麟と住吉を組み合わせた扇は珍しく、また朝廷の文化を表象するものとしても貴重な作例である。

よい君主の治世に現れるとされる瑞獣の麒麟。古代より吉祥のモチーフとして、工芸品の文様や装飾に表されてきた。「鳥獣人物戯画」乙巻(平安時代、京都・高山寺蔵)などにも登場するが、絵画の作例はそれほど多くはない。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』や『訓蒙図彙』に本図と似た麒麟の姿が確認でき、体は鹿、蹄は馬、尾は牛、五彩の身体に一本の角があるという。

青緑山水の中に立つ麒麟の身体は、群青に緑青の円文が、首や胴体の一部には薄い朱が施される。顔や尾などに生える毛は茶地に金泥や墨線が引かれる。身体から炎状の翼が生え、玉眼は群青の上に金泥を用い、厳しい表情を浮かべる麒麟の姿は画面上部にたなびく赤い瑞雲とともに、神聖な雰囲気を与えている。

裏面には歌枕として有名な住吉の風景が描かれる。住吉大社の景観は、江戸時代前期頃から同じく摂津国を代表する名所である四天王寺と共に屏風などにもよく描かれてきた。

遠山に霞がたなびき、眼下に広がる松原の合間には住吉大社の社殿、鳥居や太鼓橋がのぞく。奥に見えるのは神宮寺の宝殿か。胡粉の州浜に群青の海面には穏やかな波が立っている。松は一本一本枝葉まで丁寧に描かれ、画面をよく見ると様々な人物が潜んでいる。参詣する武士や良家の女性、僧侶、馬に乗る人物、太鼓橋に立つ人、浜辺で行楽する人々など。葦葺き屋根の家や海に浮かぶ小舟なども確認できる。和歌の神として信仰を集めた住吉の穏やかな光景が凝縮された一面となっている。

(助教 谷嶋美和乃)

こもちひじり物語絵巻

下総国結城藩主水野家に伝来した、「妙法院殿常胤 こもちひじり繪草紙 言葉書一卷」の極札を付す絵巻である。文久元年(1861)~同3年(63)頃の書とされる紀伊新宮藩主水野忠央(1814-65)による集書丹鶴書院の蔵書目録『新宮城書蔵目録』にも「こもちひじり 妙法院常胤親王筆 一卷」と記録が残されており、新宮水野家より結城水野家の養子となった水野直(1879-1929)との関係性が考えられる。

物語の内容は、「左大臣の御子中将は、一夜の逢瀬でちみょういんの娘である姫君との間に子(姫)を成し、自分のもとで育て可愛がる。それを妬んだ継母の策略によって姫は海へ沈められそうになるが、岩屋に住む聖がおろした袋に入れられ難を逃れ、数年聖と暮らすこととなる。姫を失い悲しみに暮れていた中将だが、その後舟遊びにでかけた際、岩屋の前を通りかかり姫と再会を果たす。そして姫は美しく育ち、東宮に参内する。」というものである。お伽草子の公家物、継子物に属する『岩屋の草子』などと似た展開が見受けられる。

挿絵は12場面あり、画面を御簾などで大胆に斜めに区切った室内描写、女性の衣の文様や後ろに大きく広がる裳、文様のな海や山の表現が特徴的である。庭や屏風に描かれた植物に見られる「辻が花」風の表現は、「白描源氏歌合絵巻」など白描の小絵に通じるものがある。16世紀頃の作と考えられるが、内容、制作者も含めて今後さらなる研究が求められる。文学的にも美術的にも注目すべき作品である。

(助教 谷嶋美和乃)



(水野家より当館寄託)